

放送公開講座の大学授業への活用

テレビ科目の教養部総合科目への利用とラジオ科目の一般教育科目への利用

熊本大学教養部教授 今 江 正 知

テレビ科目の利用は昭和60年度製作の「水と人間」、ラジオ科目は昭和58年度製作の「熊本の文学」と平成4年度製作の「熊本の文学Ⅱ」を利用して行った。テレビの「水と人間」については、製作公開された翌年の昭和61年度から熊本大学教養部の総合科目（第3年次生を対象に開講）の一つとして利用され今日に到っており、その初年度の記録は熊本大学が刊行した記録「放送利用の大学公開講座に関する調査報告書——『水と人間』（昭和60年度製作）の授業への利用」にまとめられている。今回の報告は、授業利用を始めてから7年を経過しての現状と、前回調査との比較を中心にまとめることにする。

放送による公開講座を実施するためには、大きな手間と多額の経費が必要である。全体のテーマ、13回の講義の流れ、各回の講義それぞれの個別テーマ、各回の講義内容、前後の講義との関連などについて、企画の大綱を決定するだけでも数多くの会議が重ねられる。そして、各回の講義内容や他の講義との関連などの検討を経て、次第に具体的な計画に仕上げられ、さらに、企画の細部の詰め、テキストの作成、放送用台本の作成、各方面への取材とスタジオでの収録、そして編集作業の終了まで、実に多くの人たちの膨大なエネルギーが投入されている。45分×13回の放送による公開講座のビデオテープは、まさに、大学と放送局関係者の英知と努力の結晶である。

これだけの手間をかけて製作したものを、たった1回の放送に使用するだけでは、余りにももったいない。大学教育の中に活用することはできないか。それも、断片的に1回分を利用するとかテープの一部分だけを使うとかではなく、全体を丸のまま使えないかと考えたのが授業利用のきっかけであった。

放送による公開講座への参加は、苦労が多かったが、貴重な経験でもあった。これまで言葉と印刷教材を中心に授業を進めてきた者にとって、映像の持つ力に改めて驚かされただけでなく、自分自身の講義に関する考え方を反省させられるなど、いろいろな意味で収穫も多かった。講義の中で時々スライドやビデオなどを見せるだけでは視聴覚教育とは言えないこと、映像の力を十分に活用するためには、何故そこに映像を用いるのかという原点からもう一度考え直す必要があるなどを、番組製作の途中から実感をもって考えさせられたことである。

主任講師が教養部の総合科目の担当者であったのを幸いに、教養部のメンバーを中心に放送終了後は総合科目として開講することも検討しながら、放送用の計画を仕上げる作業を進めた。というのも、放送による公開講座の内容をまとめていく作業が、基本的に総合科目の新しい開講テーマを作る作業と共通部分が大きかったからである。このようにして、「水と人間」は放送したままの形を基礎に昭和61年度から教養部の総合科目として開講することになった。その後、同じように「音と人間」（昭和63年度製作）も総合科目として開講されている。それらと

は逆に、昨年度は総合科目「熊本城」を基礎にテレビ講座「熊本城を科学とする」が作られ、本年度は総合科目の「映画文化史」を基礎にラジオ講座「映画、この百年——地方からの視点」が製作中である。

授業の実施方法

(1) 授業への利用形態

公開講座による教育と大学教育とは、そのレベル・質とも大きくなっている。したがって、放送に利用した映像を学生に見せただけでは、大学教育としては不十分である。しかし、45分の放送の中に凝縮された話題や映像には、それを素材として発展させれば大学教育の中で活用できるものを多量に含んでいる。放送では簡単な説明ですませていたことを、学問の体系の中に位置づけ、精密な論理で説明すれば、言葉だけの講義より有効で質の高い講義にすることも可能である。問題は、どのようにしたら文字や言葉の長所と映像の長所とを生かすことができ、短所を相互に補うことができるかである。

放送利用の大学公開講座シンポジウム（第2回）の第3セッション「授業への活用について」の中に、ビデオなどの利用を「お茶を濁している」と批判される例のあることが紹介されている。それは極端な無理解によるものだが、安易に視聴覚教材を導入すると結果的に「お茶を濁す」ことになるから、利用計画を立てる場合には、担当者が十分に反省し検討を加えて置かなくてはならない。

というのも、ビデオなどを講義に用いると、学生は興味を持つし、具体的な映像で示されるのでわかりやすいという。たしかに、生物学や地学などでは現場の生々しい現象を、また、高倍率に拡大した映像や高速・微速撮影で時間の尺度を変えた映像を示すことの出来るビデオ教材は、教育上極めて有効なものといえる。しかし、学生達がわかりやすいと言ったからといって、本当にわかったのか否か、また、「わかる」とはどういうことかを、教える側としては常に考えておかねばならない。

「水と人間」の授業利用にあたっては、ビデオを視聴させた後、見た内容について文章化させる作業を行った。これは、ビデオを真剣に視聴させるための処置であるだけでなく、目で見て耳で聞いたことを文字にすることを通じて、ビデオの内容について思考させることが目的だった。ビデオを用いて行う授業は、受講学生に画一的な見方を強いいることではない。全学生に全く同じ情報を提供しながら、彼らがどこに注目し、そこから何を、どのように考えたか、その差を基盤にして後の授業を行うことが大きな意味を持つてくる。

放送を利用する教育は、その性格から講義内容の一方的伝達になり易く、講師と受講生との対話や受講生同士のコミュニケーションが少なからざるを得ない。スクーリングはこの欠点を補うためのものであるが、回数・時間に限りがあるため、十分な効果を期待することは出来ない。また、常に目の前に存在する学生の反応を見ながら講義をしてきた者にとって、反応のないテレビカメラに向かって講義することは大きな苦痛であった。また、生身の人間でない、機械を通じて行われる講義に、視聴者がどう反応するかも不安であった。したがって、教室に集まった学生全員にビデオを視聴させ、視聴したものの内容を直ちに書かせることは、視聴者の反応について考えるためにも有効であった。

(2) 熊本大学における総合科目の実施形態

熊本大学教養部の総合科目は、昭和39年度に試行されたのが始まりだが、現在に続く形のものは昭和45年度から行われている。

総合科目は全て4単位の自由選択科目で、第1年次生を対象に開講される単独教官による授業と、第3年次生（医学進学課程は第2年次生）を対象に開講される複数教官による授業がある。この2種類の総合科目は、開講対象年次が異なるだけでなく、履修に関する事務処理までが大きく異なっている。したがって、本報告書では、「水と人間」と同じ種類の授業科目（第3年次生対象の、複数教官によるもの）についてだけ説明し、第1年次生を対象とするものの説明は省略する。

複数教官による総合科目は、表1に示したように総合科目Ⅰ－Ⅳの4授業科目があり、平成4年度には「水と人間」を含めて23テーマの23クラスが開講された。この総合科目は、23テーマが月曜日の第4時限と第5時限に配当され、14時30分から16時までの第4時限に17クラス、16時10分から17時40分までの第5時限に「水と人間」を含む6クラスが開講され、90分授業として行われている。

表1 平成4年度開講の総合科目

授業科目名	テーマ名
情報科学Ⅱ	情報、情報化と社会
環境科学Ⅱ	人間と環境、資源と現代社会、水と人間
総合科目Ⅰ	核の科学－放射線と原子力－、科学技術とその世界
総合科目Ⅱ	文化と宗教、言語と人間、比較文学、宗教と日本、映画文化史、世紀末の文化
総合科目Ⅲ	東南アジア論、熊本城、現代の産業と社会、地域政策
総合科目Ⅳ	薬の科学、資料整理学入門、行動、音と人間 健康Ⅰ――生活と保険――、健康Ⅱ――生と死と性――

何れも、通年開講の4単位科目である。

平成4年度の総合科目23テーマの受講申込者数は1837名であった。「水と人間」の受講希望者は283名あり、「薬の科学」の264名に次ぐ2番目の数であった。その中から無作為抽出で選んだ84名が履修することになった。前回は、第1希望が59名、第2希望で回ってきた者が33名だったから、大幅な増加といえる。ただし、以前は第4時限だけだった総合科目が、第5時限にも開講されて受講し易くなった影響が大きいので、講義内容や社会条件の変化で受講希望者が増えたとはいえない。

(3) 総合科目「水と人間」の講義スケジュール、個別テーマと内容、担当講師

放送による公開講座の受講者募集用パンフレットの科目のねらいと個別テーマの内容説明を基礎に、「一般教育課程の案内」に掲載する講義概要を作製した。したがって、学生は、放送による公開講座の応募者とはほぼ同じ印刷資料を判断材料として受講を決めたことになる。

その資料に、回数、講義日などを記入したものが表2である。ただし、平成4年度は講師の

都合で放送時と同じ順序では講義ができず「⑥水とくらし」「⑦川は生きている」「⑧ダムは語る」を「⑨地下を流れる水」「⑩山を治める」の後に実施している。

表2 平成4年度の講義スケジュール、個別テーマと内容、担当講師

<p>水は地球上の無機的環境の中だけでなく、生態系の中を他の物質やエネルギーとともに循環している。そして、このことが水と人間の関係を不可分のものとし、水の循環と人間の生活の間に、いろいろの問題を生み出している。本講では、できるだけ身近な例で具体的な問題として水をつめ、水の現状および将来について考える。</p>				
回数	開講月日	個別テーマ	内 容	担 当 者
1 2	4月20日 4月27日	① 産湯から 死水まで	水とは何か。地球は水の惑星といわれるが、水はその環境形成にどのようにかかわっているか。地球の生物はすべて水を基礎にして生命を維持しており、人間のくらしや産業も水なしでは成り立たない。その重要性の導入。	教養部教授 今江正知
3 4	5月11日 5月18日	② きれいな水 おいしい水	地球上のいろいろな水、硬水と軟水、海水と淡水などの性質、また、それらの循環と日本の水事情について、陸水を中心に述べる。	教養部教授 高橋俊正
5 6	5月25日 6月1日	③ 世界の水と 日本の稲	生産を維持する基盤として最も古い時代から、水の確保を社会的な制度としたのは農業であり、その配分の方式には地域の実状・時代を反映してさまざまなものがある。日本と東南アジアの湿潤地帯の例を中心に、中近東など砂漠地帯の例を対比して、水と人間のかかわりを述べる	九州東海大学 能楽部教授 家永泰光
7 8	5月25日 6月1日	③ 水と 稲作社会		九州東海大学 能楽部教授 家永泰光
9 10	6月22日 6月29日	⑤ からだの水	水は人体の主要構成要素で、必要量を摂取しなければ生命の維持すらできなくなる。と同時に水は「洗う」ことを中心に生活の中で重要な地位を占める物質である。その水を確保するための泉、井戸、上水道の歴史も含めてくらしと水について考える	医学部教授 三浦 創
11 12	7月6日 9月14日	⑨ 地下を 流れる水	地上に降った雨は地表を流れるだけでなく、地中にしみこんで地下を流れ、また、地下の水ガメに貯留されている。その地下水の実態と現代における諸問題について考える。	教養部教授 高橋俊正
13 14	9月21日 10月12日	⑩ 山を治める	治山治水は古くから国家百年の計の基本とされてきた。しかし、急激に進行した人工林化などによって山林の洋装は大きく変化し、いろいろの問題を生じている。そのことを水資源の確保と環境保全の立場から考えたい	教養部教授 今江正知
15 16	10月19日 10月26日	⑥ 水とくらし	都市は大量の水を使う。熊本の地下水を利用する水道施設やおいしい水の話、また、使った後の水をきれいにし、川に戻す下水道のはたらきや廃水の流れ込む熊本市藻器堀川の実態を中心に、この問題を考えたい。	工学部教授 中島重旗
17 18	11月9日 11月16日	⑦ 川は生きている	人間は水なくしては生きていけないので、古くから川のほとりに住んできた。その川に排水が流れこんで、川に棲む生物の浄化能力をこえてしまった。川の生物について知り、人間が昔のように川に親しむにはどうすればよいかを中心に洪水防御とのかかわりも話題にする。	工学部教授 中島重旗

19 20	11月30日 12月7日	⑧ ダムは語る	川の利用の仕方はどう変わったか。河川災害や治水方法のうつり変わりを緑川を例に説明し、ダムで治水と利水ができるのか、ダム貯水池の濁りや富栄養化などについても考える。	工学部教授 中島重旗
21 22	12月14日 12月21日	⑪ 水と文学	水清く、緑豊かな自然に恵まれた日本は、その風土を反映した文学を育ててきたが、それでは詩歌、物語、小説などの文学作品、或いは諺などの慣用的言い廻しに於いて水はどう表現されているであろうか。それら水に関する表現を通して日本人がみずをどのようににんしきし、如何なる感情を抱いてきたかを考える。	文学部教授 伊原信一
23 24	1月11日 1月18日	⑫ 水と民俗	水にかかわる生活習慣、水と祭・信仰について述べ、水と日本人について考える。	文学部助教授 伊原信一
25	1月25日	⑬ 水の将来	全講師による座談会	教養部教授 今江正知

(4) 平成4年度の「水と人間」受講者

平成4年度「水と人間」履修者の学部別、男女別の数、単位取得者の数、および、後で述べるアンケートに回答した者の数は表3の通りである。

表3 平成4年度「水と人間」学部別・男女別の受講者数

学部(男女)		受 講 者	単位取得者	アンケート回答者
文学部	男	9	4	4
	女	6	2	2
教育学部	男	11	9	9
	女	6	5	4
法学部	男	6	0	0
	女	0	0	0
理学部	男	1	0	0
	女	4	2	2
医学部	男	3	2	2
	女	0	0	0
薬学部	男	5	3	3
	女	3	3	3
工学部	男	26	19	15
	女	4	3	3
計		84	52	47

なお、52名の単位取得者の成績は、優が28名、良が19名、可が5名であった。また、単位が取得出来なかった者は32名だが、その内22名は講義開始早々の履修放棄であった。

なお、前回の履修者は72名で、67名の単位取得者の成績は、優が22名、良が25名、可が20名

であった。

(5) 教室の形態と設備

教室は最大収容人員が132名の固定机の部屋で、視聴覚設備として20型テレビが4台天井から釣り下げて設置されている。カーテンと暗幕が設置されているが、午後の最後の授業であり、しかも西側の廊下で西日が遮られるので、教室内に直射日光が差し込むことはない。

(6) 授業実施形態の原則

表2に示したように、一つの個別テーマ（1回の放送分）につき、2回の講義時間をとった。つまり、45分のビデオ映写につき90分×2回＝180分の講義時間が用意されたことになる。ただし、平成4年度講義時間が25回しか確保されなかったため、「⑬水の将来」（最終回のまとめ）への配当だけを1回とした。また、第5回はビデオの映写だけで講義は行われなかった。

配当された2回の講義時間のうち、1回目にビデオを映写し、その直後にビデオの内容について考えたことを書かせることを基本とした。ビデオ映写の前後に多少の説明をすることもあったが、放送に用いられたものをそのまま利用することを原則としたので、長い説明は加えなかった。また、1回分のビデオは一気に映写し、分割して映写することはしなかった。

ビデオ映写終了後、直ちにB4版の洋白紙に縦置き横書きで、ビデオを見て考えたことを自由に書かせた。その時間は30分程度である。書く内容については、「感じたことではなく、考えたことを書く」、「思いついたことを羅列するのでなく、見て考えたことを論理的に書く」、「ビデオで紹介された事実や講師が述べた意見と、自分の意見を区別して書く」よう、繰り返し注意した。

2回目の講義時間は、ビデオの一部分を詳しく体系的に講義するとか、プリントなどの印刷教材を配布して講義をするとか、学生がB4版の紙に書いたことから問題をとりあげたり、別のビデオを映写したり、問題に解答させるとりなど、形式は一定せずに利用したが、掘り下げて講義することが多かった。

(7) テキストなどの使用

放送による公開講座のために作られたテキストは、一部を講義用のプリントにして用いたが、受講学生全員にテキストを持たせることはしなかった。テキストの残部がなかったことが第一の理由だが、2回目の講義は、テキストに掲載されている範囲を越えたり、テキストよりも突っ込んだ詳しい内容になる可能性が高く、それに合わせてプリントなどの資料を準備すればよいと考えたからである。また、テキストがあると、ビデオを見たり講義を聴いたりする時に、後でテキストを見ればよいと、手抜きをして視聴する恐れもあったからである。

(8) レポートの提出

熊本大学の総合科目では、1人の講師の講義がすむと講義の範囲からレポートの課題を与え、2－4週間くらいの期限で提出させることが習慣になっている。しかし、「水と人間」では、2回の講義毎に講師が交代するか、講師は同じでも話題が変わる形で全体が構成されている。

したがって、話題が変わる毎にレポートを課すと学生の負担が過重になるので、大きなレポートは課されないこととした。

(9) 試験と成績の評価

前期、後期とも定期試験は行わなかった。講義の時間に平常考査のような形で小さな試験をしたり、質問に答えて書かせたりした程度である。成績の評価は、ビデオ視聴の直後に書かせたもの、提出されたレポートや授業時間中に書かせたものなどによって各講師が評点を出し、それをオーガナイザー（放送時の主任講師）がまとめて4単位の授業科目としての成績の評価を行った。

アンケート調査

受講学生に対するアンケートの設問や実施方法は、昭和61年度と同じに行った。昭和61年の設問は、ビデオ視聴後に書かせた文章やレポートの内容などで受講学生の反応を確かめ、学生の受講態度や講義を行っての印象などを基に作ったものである。実施は講義の最終回に行った。

アンケートは、幾つかの選択肢から選ばせる方式よりも、「何故この講義の受講したか」など、学生自身の言葉で書かせる設問を多くした。相手に書かせると、いろいろな書き方が出て集計作業が困難になり、結果がはっきりと数値で表されない欠点がある。しかし、このような特殊形態の授業では、個々の学生に回答を書かせることで、学生の生の意見と反応を集めることが重要と考えたので、この方式をとった。

アンケートの集計作業で最も難渋したのは、学生を書く文章が予想以上に不明確だったことで、これは昭和61年のときよりも悪化している。何を言いたいのかははっきりせず判読に苦しむものや、具体性が乏しくて集計するときに無視せざるを得なかった回答も相当ある。また、無回答や、1ヶ所に複数の回答があったりして、集計された数の合計は一定していない。

また、このアンケートとは別に、学生との対話によって得られた情報や、授業に対する感想や意見として書かせたものも、アンケートの結果を考える資料とした。その点、この報告は定性的、というよりも多分に主観的なものになったが、このような特殊形態の授業に関する学生の反応や考え方は掴めたと思う。

(1) 「水と人間」受講の動機

設問Ⅰ いくつもある総合科目のテーマの中から「水と人間」を選んだ理由を、出来るだけ具体的にあげて下さい。

- | | |
|-----------------------------|------|
| ①「水」に興味があったから。 | (8名) |
| ②自分の身近な問題、生活に密着したテーマだから。 | (7名) |
| ③「水」と「人間」という組み合わせが興味をひいたから。 | (6名) |
| ④環境問題としての「水」に関心があったから。 | (6名) |
| ⑤「水」の危機を感じているから。 | (4名) |
| ⑥熊本の水は「良い水、おいしい水だ」と聞いていたから。 | (3名) |
| ⑦熊本市の地下水問題に関心があったから。 | (3名) |

- ⑧自分の専門と関係が深く、将来役に立つと思ったから。(1名)
- ⑨川・ダムなどの水質に以前から興味があったから。(1名)
- ⑩講義概要を読んで、他人の評判を聞いて。(3名)
- ⑪なんとなく、特になし。他の科目より興味があったから。(3名)

昭和61年の受講者は工学部学生が多かったため「⑧専門と関係がある」という回答がトップで13名もあったが、今回は「水」そのもの、「水の周辺」の問題を知りたいという動機が多くなった。「⑤水の危機」とか「④環境問題」という面から受講した学生が増えたことも、この7年の間に、環境問題としての「水」の重さが、世間に広く定着してきたことを示している。

「⑥熊本の水」が極めて恵まれたものであること、また、その「⑦熊本の地下水」に重大な問題が生じていることが、熊本ではマスコミの話題となって繰り返し報道されている。しかし、その具体的な事実から受講を考えた学生は多くない。昭和61年の学生はもっと少なかった。その点、昭和60年の放送による一般受講者が示した高い問題意識とは対称的である。

最近の学生は新聞を読まず、世事に疎いといわれる。ここにも社会全般に関心の薄い学生の現状が現れている。

(2) 一般の講義との比較

設問Ⅱ 講義回数の半分にVTRが用いられるという形態を、普通の講義と比べてどう思いますか。

- ①具体的、視覚的に実際の現場が見られるので分かりやすい。(24名)
- ②変わった趣向で新鮮さがあった、興味が湧く、退屈しない。(10名)
- ③テレビ時代の学生向きである。(2名)
- ④講義の前に呼び知識が得られてよい。(2名)
- ⑤一方的でよくない。(2名)
- ⑥普通の講義の方がよい。(3名)

アンケートの結果とは別に、学生たちが驚くほど熱心にビデオを見たというのが、この形式の授業を始めたときの感想であった。しかし、7年目の今回は少し異なってきた。視聴覚教材の普及や社会一般における映像媒体の氾濫の中で、映像で提供される情報に馴れてしまい、CMを見るような、しらけた態度で見る態度が定着してきたのかもしれない。

とはいえ、ビデオ映像の効果を認めた①と、特殊な授業形態に興味を示した②を加えると34名になる。アンケート回答者の70%以上（前回は80%以上）が、この形態を良いと評価している。しかし、それを実効あるものにするには教官側の努力が必要である。

これに対して、⑤⑥のようにビデオよりも講義の方が良いと主張しているものもあるが、10%程度で数は少ない。2回の講義のうち1回はビデオ使用という講義の半分はビデオを見ているように錯覚する。しかし、実際は180分の授業のうち45分だから、講義時間の4分の1で、最初の印象ほどビデオの時間が多くなかったからであろう。

「④講義の前に予備知識が得られてよい」という指摘を2名の学生がしている。前回までは、

教官側もあまり意識していなかったことだが、これは重要なポイントである。放送による公開講座の内容は、一般社会人の常識を基礎に置いて、映像と解説を積み重ねて作られている。ところが、現代の学生は、その一般常識に欠けるところが大きく、その欠けたところを埋める努力をあまりしない。「習っていない」とか「入試で選択しなかった」とかが、無知であることの免罪符になると考えているように思える。

その点、まず一般社会人向けのビデオを見せ、具体的な映像によって問題の基礎と現状などを説明しておく形は、受講学生を同じスタートラインに揃えて次回の講義に臨ませる大きな効果がある。狭い範囲に対象を絞った専門の講義と異なり、各学部の学生を相手に行う一般教育、とくに総合科目では、このスタートラインに学生を並ばせることは極めて重要である。ビデオを視聴した後、すぐに内容などについて書かせたことも、その効果を高めている。

前回の報告でも述べたが、②に出てくる「退屈しない」は、褒め言葉である。アンケートと別に書かせた授業に関する感想などにも、「楽しく授業が開けた」などの言葉とともに、「退屈しなかった」という言葉がよく出てくる。「楽しく」「退屈させない」ことが授業の基本と言われるとわびしくなるが、教官側としては、娯楽番組的なレベルとは質的に異なる。強い緊張を伴った「退屈できない」講義を目指すということが重要であろう。

今回のアンケートで、前回はなかった「⑥普通の講義がよい」という意見が3名あった。1割に満たぬ小数意見だが、この形の講義の進め方にマンネリ化が出てきたのか、反省する必要がある。

(3) ビデオ利用の長所と利点

設問Ⅲ あなたにとって、このようにVTRを利用することの長所・利点はどんなことでしたか。

- | | |
|----------------------|-------|
| ①具体的に実際の現場がみられる。 | (18名) |
| ②映像があってわかりやすい。 | (7名) |
| ③内容がまとめられていて、わかりやすい。 | (7名) |
| ④印象が強く、説得力がある。 | (5名) |
| ⑤映像があると、熱中でき、興味が持てる。 | (4名) |
| ⑥グラフ、表、資料などが多く見られる。 | (2名) |
| ⑦音声がよくとどく。 | (3名) |
| ⑧リラックスして聞ける、娯楽感覚。 | (1名) |
| ⑨貴重な資料や映像がみられる。 | (1名) |
| ⑩短時間で理解でき、時間のロスがない。 | (3名) |
| ⑪先生がいなくても授業ができる | (1名) |

「①具体的に現場がみられる」など映像の存在を評価する意見が多いが「⑤映像があると、熱中でき、興味が持てる」とあるように、テレビが映れば見るという行動になっているようにも思える。このことについては、後で述べる。

「③内容がまとめられていて、わかりやすい」は、教師とし反省すべき点である。1年また

は半年の授業の中の1回とは違って、苦勞して45分の中に押し込んだ情報量の大きさと、それを分かりやすく構成するためにつぎ込まれた労力への評価だからである。

「⑦音声がよくとどく」は、前回にはなかった意見である。教室に設置され映像機器は以前と同じもので、音声に改良が加えられたわけではない。一般の講義で、以前と比べて大きな声で講義をする先生が減ってきたため、ビデオの声の方が聞き易くなったのかもしれない。

(4) ビデオ利用の短所と欠点

設問Ⅳ あなたにとって、このようにVTRを利用することの短所・欠点はどんなことでしたか。

- | | |
|--------------------------------|-------|
| ①進行が一方向的、こちらの反応が伝わらず聞き落しが多くなる。 | (11名) |
| ②話が早すぎて、ついていけないところがある。 | (7名) |
| ③画面の中の図や表が小さくて見にくい。 | (5名) |
| ④つまらないと寝てしまう、雑談や内職が多くなる。 | (5名) |
| ⑤資料が古い | (4名) |
| ⑥受身になってしまう。 | (3名) |
| ⑦メモがとりにくい。 | (3名) |
| ⑧熱気が伝わらず緊張感がない、集中できない。 | (2名) |
| ⑨音声聞きとりにくい。 | (2名) |
| ⑩単調で退屈。 | (1名) |
| ⑪先生の講義の時間が少なくなる。 | (1名) |
| ⑫深く考えないとまがらない。 | (1名) |
| ⑬特にあげることはない。 | (6名) |

全体として、長所の欄よりも記入が少なく、この特殊形態の授業を受け入れていると思われる。

「①進行が一方向的」で「⑥受身になり」、「⑫深く考えない」という短所を挙げた者は15名で、約3分の1である。これは、ビデオを見た後すぐに内容などを書かせる形をとっていたので、緊張感を持って視聴したために気づいた点であろう。ただ、注目すべきことは「②話が早過ぎてついていけない」という、前は1人もなかった意見が7名も出てきていることである。前回と同じビデオを、同じ教室で、同じ方法で使っているのに話が早過ぎるというのは、7年の間にビデオの内容を理解する能力が落ちいるとしか考えられない。

このことについて学生と話をしてみると、「ビデオを見ながら、話を聞きながら、メモをとるなんて無理難題」と考える学生が思いがけず多い。実社会で仕事をするには、「他人の話を聞き、考え、必要ならメモをとり、判断して自分の意見を述べるのが当たり前」と教えなければならないのが、現代の学生である。

「⑤資料が古い」も今回初めて出てきた意見である。製作されてから7年を経過しているから、一部に古い部分が出てきているのは事実である。そこで、学生の指摘を率直に受け入れて改訂版を作らなければならないとか、もう古くて使えないとか発送する人もいる。しかし、そ

の古くなったデータが現在の状況と食い違っているなら、講義の時間に訂正すればよい。開き直った言い方だが、その訂正で数年間の進歩を教えることもできる。古いデータの訂正を指示しない場合もあるが、それは、全体の話の流れとは関係ない、または、歴史的な意味でデータが生きる場合である。ビデオだけを視聴させる場合には資料の古さは障害となるが、この授業のようにビデオと講義がセットになっている場合には、必ずしも短所だとはいえない。

(5) ビデオ視聴後、直ちに内容などを書く授業形態

設問Ⅴ ほとんどの場合、VTRを見終わってすぐに考えたことを書いてもらいましたが、この形式をどう思いますか。

- | | |
|-------------------------------|-------|
| ① (印象が強く残っているので) 忘れないうちに書ける。 | (15名) |
| ② ビデオを真剣に、考えながら見ることになる。 | (4名) |
| ③ 後でレポートを提出するより、その日の内にすむからよい。 | (4名) |
| ④ 自分の考えを即座にまとめる練習になる。 | (4名) |
| ⑤ 素直な感想が書けて、楽しい。 | (1名) |
| ⑥ 時間が無駄にならない。 | (1名) |
| ⑦ 出欠と内容の理解度をみるには、うまい方法である。 | (1名) |
| ⑧ 良い、問題なし、別にかまわない。 | (6名) |
| ⑨ 良いと思うが、慣れると形式的になる。 | (1名) |
| ⑩ 考える時間、まとめる時間が少なかった。 | (7名) |
| ⑪ 苦労した、困った。 | (4名) |
| ⑫ 個人的には好きでない。 | (2名) |

この結果は、前回と驚くほど一致した。文章を書く作業は、学生たちにとって大きな負担になる。書いたものを採点されるので、ビデオを真剣に見なければならない。また、文章を書くことも得意ではない。そのような苦労を反映して、この欄の記入は多い。

しかし、毎回苦労して書いたという割には、書いたものの内容は質・量とも貧弱である。初めのうちは、単語の羅列や、心覚えのメモを整理した見出しを並べただけのものも多い。45分間メモを取りながら見る、考えながら見る作業に馴れておらず、また、30分くらいで自分の考えを論理的にまとめる仕事にも馴れていないからであろう。

強制的に文章を書かせることに対しての反発はない。というより、反発した学生は履修放棄してしまったからであろう。アンケートと別に書かせた授業全体に関する感想などでも、肯定的に受け止めている学生が目立つ。

文章を書かせることの問題については後で述べる。

アンケート集計の①-⑦は肯定的な意見で、3分の2近い30名が書くことのプラス面を評価している。このような意見が、前回は3分の1強だったから、この方式の支持が増えているといえよう。⑧-⑨の7名は、文章を書くことを良いと認めているようにも、どうしてもよいと放り出しているようにもみえる。⑩-⑫の13名は書くのに苦労したと言いながらも、書くことの価値を否定しているのではない。作文教育の必要性を自覚したとまではいわないが、多くの学

生が文章を書く訓練が必要と感じ始めたように思える。

(6) 13回の個別テーマに関する興味

設問Ⅵ 次の13回のVTRのうち、興味深かったものに○印、とくに興味深かったものに◎印、逆に、興味が持てなかったものに×印を、次頁の記入欄に、6個つけて下さい。(どの印でもよいから、全部で6個つける)

表4 個別テーマ毎の興味

	平成4年度				昭和61年度			
	◎	○	×	計	◎	○	×	計
産湯から死水まで	6	16	8	30	3	14	5	22
きれいなおいしい水	7	16	1	24	11	22	0	33
世界の水と日本の稲	0	7	8	15	5	21	6	32
水と稲作社会	1	5	10	16	0	15	4	19
からだと水	7	16	1	24	18	21	1	40
水とくらし	2	14	0	16	0	13	1	14
川は生きている	6	10	0	16	2	11	2	15
ダムは語る	8	16	2	26	19	20	4	43
地下を流れる水	1	13	1	15	7	18	1	26
山を治める	20	16	2	38	17	27	2	46
水と文学	5	11	10	26	6	10	25	41
水と日本人	3	12	2	17	9	19	9	37
水の将来	4	9	1	14	0	12	7	19
計	70	161	46	277	97	223	67	387

13回の個別テーマのうち6個に印をつけよ、印は○、◎、×のどれでもよいという設問である。○、◎、×の数の割合も決めてないし、全員がきちんと6個ずつに印をつけてもいないので、正確な数字の比較はできない。また、視聴したときからの経過時間も個別テーマ毎に異なるので、1年の講義が終わった後の印象の強さ、関心のもたれ方の指標と考え方がよい。なお、今回の数値の方が少ないのは、前回の回答者数が60名、今回が47名であることによる。

前回に比べて目につくのは、興味の対象が全体に広がったことである。社会一般の風潮として水に関する話題が増えており、関心の持たれ方も多様化してきたことの反映であろう。学生の関心が強かったのは、「②きれいな水おいしい水」「⑤からだと水」「⑧ダムは語る」「⑩山を治める」であるが、いずれも、日頃あまり考えない、見過ごしている視点からの話題だったことが、新鮮な興味を惹いたものと思われる。とくに、「⑩山を治める」は、前年の台風19号が九州各地に甚大な被害をもたらした、その影響が各地に残って話題になり続けていることの影響であろう。

「⑤からだと水」は大きく減少しているが、これは担当講師が不在だったため、ビデオの視聴

だけで済ませたからである。講義を欠いたことで、個別テーマへの関心にこれだけの差が出ることは、重複して行っているようにみえる講義の重さを象徴している。

前は「⑩水と文学」に×印が多かったのは、受講者に工学部学生が多かったためであった。今回、偏りが顕著でなくなっているのは、表2にみるように、受講学生の所属学部の変遷がなくなったことが原因であろう。

アンケートの設問は、ビデオの内容に関するものだが、2回目の講義の形や内容も大きく影響している。たとえば、「⑩山を治める」では、講義のときにNHKの「杉山崩壊」という特集も利用した。これは、九州の杉造林地の問題を特集したもので、公開講座でも取り上げた市房山の崩壊から話が始まっていたので、一つながりのものとして記憶されたようである。

(7) 13回の個別テーマの理解（難易度）

設問Ⅶ VTRを見終わった段階で、どの程度理解出来ていたと思いますか。各回毎に、下記の0-5の番号で記入して下さい。

0. 欠席して見ていない 1. 難しすぎて、ほとんどわからなかった
2. 難しく、理解できないところがあった 3. 大体理解できた
4. やさしくて、充分理解することができた 5. やさしすぎて、つまらなかった

表5は、13回の個別テーマについて、昭和60年度の一般受講者を対象に行った毎日アンケートの中の設問と同じ形式で、平成4年度の受講生対象に、難易度を1-5の数字で記入されたものである。

比較のために、その昭和60年度の一般受講者を対象に行った結果を、表6に示した。ただし、これは毎回アンケートの中の設問だから、一般受講者は放送を視聴した直後に記入している。学生は、1年間にわたる講義の最終回にまとめて記入したので、同一条件での結果とはいえない。表7は昭和61年の学生の結果である。

表5 各回毎の難易度申告人数と割合（平成4年度、学生受講者）

	0	1	2	3	4	5	計
①産湯から死水まで	3	2 4.5%	3 6.8%	31 70.4%	8 18.1%	0	44 100%
②きれいなおいしい水	1	0	3 6.5%	32 69.5%	9 19.5%	2 4.3%	46 100%
③世界の水と日本の稲	2	0	13 28.8%	30 66.6%	1 2.2%	1 2.2%	45 100%
④水と稲作社会	3	2 4.5%	10 22.7%	27 61.3%	4 9.0%	1 2.2%	44 100%
⑤からだの水	7	1 2.5%	11 27.5%	15 37.5%	12 30.0%	1 2.5%	40 100%
⑥水とくらし	5	0	7 16.6%	28 66.6%	7 16.6%	0	42 100%

⑦川は生きている	5	0	9 21.4%	22 52.3%	11 26.1%	0	42 100%
⑧ダムは語る	7	3 7.5%	8 20.0%	25 62.5%	4 10.0%	0	40 100%
⑨地下を流れる水	6	0	8 19.5%	27 65.8%	6 14.6%	0	41 100%
⑩山を治める	1	1 2.2%	4 8.6%	30 65.2%	11 23.9%	0	46 100%
⑪水と文学	5	2 4.7%	20 47.6%	14 33.3%	4 9.5%	2 4.7%	42 100%
⑫水と日本人	6	0	10 24.4%	25 60.9%	5 12.2%	1 2.4%	41 100%
⑬水の将来	1	1 2.2%	8 17.3%	27 58.6%	9 19.6%	1 2.2%	46 100%

%は、個別テーマごとに1－5の回答をした人数に対する割合

表6 各回毎の難易度申告人数と割合（平成60年度、一般受講者）

	1	2	3	4	5	計
①産湯から死水まで	0	0	29 59.2%	20 40.8%	0	49 100%
②きれいなおいしい水	0	1 2.2%	30 66.7%	14 31.1%	0	45 100%
③世界の水と日本の稲	0	6 13.3%	30 66.7%	9 20.0%	0	45 100%
④水と稲作社会	0	3 7.7%	30 76.9%	6 15.4%	0	39 100%
⑤からだと水	0	3 7.3%	32 78.0%	6 14.6%	0	41 100%
⑥水とくらし	0	0	35 92.1%	3 7.9%	0	38 100%
⑦川は生きている	0	2 5.0%	32 80.0%	6 15.0%	0	40 100%
⑧ダムは語る	0	0	30 78.9%	8 21.0%	0	38 100%
⑨地下を流れる水	0	2 5.6%	29 80.6%	5 13.9%	0	36 100%
⑩山を治める	0	5 14.7%	26 76.5%	3 8.8%	0	34 100%
⑪水と文学	0	7 19.4%	28 77.8%	1 2.8%	0	36 100%

⑫水と日本人	0	2 6.0%	28 84.8%	3 9.0%	0	33 100%
⑬水の将来	0	1 2.9%	31 88.6%	3 8.6%	0	35 100%

この表は、昭和60年度の毎回アンケートに関する実施報告書からの引用だが、%は回答した者だけの割合に計算し直してある。

表7 各回毎の難易度申告人数と割合（昭和61年度、学生受講者）

	0	1	2	3	4	5	計
①産湯から死水まで	1	2 3.4%	4 6.8%	38 64.4%	11 18.6%	4 6.8%	59 100%
②きれいなおいしい水	0	0	2 3.3%	42 70.0%	16 26.7%	0	60 100%
③世界の水と日本の稲	2	3 5.2%	20 34.5%	31 53.4%	4 6.9%	0	58 100%
④水と稲作社会	1	2 3.3%	17 28.8%	36 61.0%	4 6.8%	0	59 100%
⑤からだと水	2	1 1.7%	6 10.3%	41 70.7%	10 17.2%	0	58 100%
⑥水とくらし	6	1 1.9%	11 20.4%	39 72.7%	2 3.7%	1 1.9%	54 100%
⑦川は生きている	0	1 1.7%	13 21.7%	38 63.3%	8 13.3%	0	60 100%
⑧ダムは語る	1	1 1.7%	15 25.4%	37 62.7%	6 10.2%	0	59 100%
⑨地下を流れる水	1	2 3.4%	10 16.9%	37 62.7%	9 15.3%	1 1.7%	59 100%
⑩山を治める	7	2 3.8%	5 9.4%	33 62.3%	13 24.5%	0	53 100%
⑪水と文学	2	14 24.1%	20 34.5%	17 29.3%	7 12.1%	0	58 100%
⑫水と日本人	5	3 5.5%	26 47.3%	23 41.8%	2 3.6%	1 1.8%	55 100%
⑬水の将来	1	0	8 13.6%	37 62.7%	10 16.9%	4 6.8%	59 100%

%は、個別テーマごとに1－5の回答をした人数に対する割合

学生の結果は、昭和61年度と平成4年度ともよく似ている。違いといえば、平成4年度の方が数値が左寄りに移動、つまり、難しいと考える方向に少し動いていることと、個別テーマへの配分が少し異なっている程度である。したがって、学生と一般受講者との比較は、平成4年度の学生で行い、必要な場合だけ昭和61年度の学生に言及することにする。

学生、一般ともに「3. 大体理解できた」が過半数を占めているが、学生では「⑪水と文学」が過半数に達していない。「⑤からだの水」「⑦川は生きている」も過半数に達していないが、両者とも「充分理解することができた」が多いので、過半数が理解できたことになる。

前は、「⑪水と文学」「⑫水と日本人」が過半数に達してなかったが、これは、前にも述べたように工学部学生が多かったため、文系の講義を難しいと感じる者が多かったためであろう。今回の学生は表3にみるように学部が分散しているので、そのような偏りなかった。とはいえ、「⑪水と文学」のようなテーマは、一般受講者の方が理解し易く、学生には理解し難い傾向がある。これは、今回のラジオ科目の授業利用でもはっきりと現れた現象であるが、現代の若者全般に読書する習慣が少ないことによる。そのため、文学的素養に欠けるというよりも、社会常識に欠けているための現象である。

「3. 大体理解できた」に回答が集中することは、放送による公開講座として検討を重ねて作られたものだから、当然といえば当然である。また、印象の薄れたものを、可もなく不可もなくの意味で「3」とする可能性が高い。この表は、むしろ、「3」から離れたものの数を見る方が得るところが多い。

一般受講と学生とを比較して、まず目につく違いは、一般は「3. 大体理解できた」と「4. やさしくて、充分理解することができた」に回答が集中して「1. 難しすぎて、ほとんどわからなかった」と「5. やさしすぎて、つまらなかった」は0であるのに対して、学生では「1」から「5」まで分散していることである。さらに、学生では「3」に次いで「4 やさしい」が多い個別テーマが7、「3. 大体理解できた」に次いで「2. 難しく、理解できないところがあった」が多い個別テーマが6と、一般より難しいとみる傾向が強い。

「①産湯から死水まで」だけが、僅かながら学生の方が一般よりも「3. 大体理解できた」とするものが多いが、他は総て一般の方が「3. 大体理解できた」の割合が高くなっている。これは、学生と一般が同じ映像教材を利用して講義を聴き続けているうちに、一般受講者は理解が進んで分かり易くなったと考え、学生は段々と難しいと考えるようになったことで興味深い。この現象は昭和61年度の学生よりも平成4年度の学生の方が強く現れている。

設問Ⅶの回答を基礎に、ビデオを視聴した学生の一人一人が全体を通じてどの程度理解できたと考えているかを知るために、放送による公開講座の毎回アンケートの手法に従って受講学生別平均難易度を算出した。その結果から各平均難易度における人数と割合を、学生人数として表8に示した。そして、比較のため、昭和60年度の放送による聴講者の数値を、一般人数として併記した。

平均難易度は次の式のように、個々の学生の個別テーマ毎の難易度（設問Ⅶ）を総計し、出席回数（難易度を回答した数）で割った値を受講学生別平均難易度とした。一般受講者の数値は、アンケートに回答された難易度の総計を回答回数で割ったものである。

$$\text{平均難易度} = \frac{\sum (\text{難易度})}{\text{出席回数}}$$

(難易度)

1. 難しすぎて、ほとんどわからなかった
2. 難しく、理解できないところがあった

3. 大体理解できた
4. やさしくて、充分理解することができた
5. やさしすぎて、つまらなかった

表 8 学生と一般受講者の平均難易度の分布

難易度の内容	平均難易度	平成 4 年度 学生人数	昭和61年度 学生人数	昭和60年度 一般人数
1 難しすぎた	1.0--1.5	0	0	0
	1.5--2.0	1名 2.1%	0	0
2 理解できない所あり	2.0--2.5	2名4.3%	8名13.3%	0
	2.5--3.0	21名44.7%	24名40.0%	14名25.5%
3 大体理解できた	3.0-	7名14.9%	10名16.7%	15名27.3%
	3.0--3.5	15名31.9%	17名28.3%	21名38.2%
4 充分理解できた	3.5--4.0	1名 2.1%	1名 1.7%	5 9.1%
	4.0--4.5	0	0	0
5 やさしすぎた	4.5--5.0	0	0	0
	計	47名 100%	60名 100%	55名 100%

学生と一般を比較して最も顕著に現れた差異は、学生が一般より 1 ランクほどビデオの内容を難しい考えていることである。昭和61年度の学生と、平成 4 年度の学生を比較すると、今回の方が少し難しいとみる傾向が強まっている。これは、非常に興味深い。というのも、学生は一般常識に欠けるからとか、学生の理解力が劣るからとかいうのではない。ビデオを視聴した 1 週間後に同じテーマで講義を聴いた学生と、放送を視聴した段階で終わった一般受講者との違いである。学生には、ビデオで見ただけでは表面的な理解だったとの自覚が育ち、深く見ようとする習慣が育ったということであろう。

このことは、次の設問Ⅷの回答からも窺えるが、このアンケートと別に欠かせた感想の中にも、自分の無知を知ったとか、いろいろな現象について簡単に考え過ぎていたなどの言葉が多く現れている。

(8) ビデオと講義との関連

設問Ⅷ V T R を見た次の週の講義について、下記のうちで該当することの多かった項目の番号を○印で囲み、その程度が強く印象に残っている講義があれば各項目の後に、前問と同じ 1-13 の数字で講義の番号をあげて下さい。

1. V T R を見て疑問に思っていたことがわかった (9 名)
(講義番号) 8、10、1、3、7
2. V T R を見た時には見過ごしていた点に気づいた (13 名)
(講義番号) 10、9、8
3. V T R では、表面的理解だったのに気づいた (11 名)

- (講義番号) 10、8、7
4. フィーリングで分かったと思っていたことが理論化された (4名)
(講義番号) 3、10
5. VTRと同じ内容の繰り返しで退屈した (11名)
(講義番号) 1、7、8、9、10
6. その他(記入欄に学生が記入) (1名)
全体的に、講義の方がよかった。

講義をビデオの繰り返しと考えた学生が11名あるが、大部分の学生はビデオの内容と同じ分野のことを、同じ用語を使って講義しても、講義にはビデオとは違う深さがあると理解している。しかし、47名のうち11名が両者の差を区別できない現実には、注視しなければならない。同じ用語を使っても「正解」を覚えるための話と、考える足がかりや考え方の筋道を理解する話は、全く別と早く理解させなくてはならない。その点、見過ごしていた点を指摘された(13名)や表面的理解だったと気づいた者(11名)が多いことは救いになる。

(9) 「水と人間」を受講して得たもの

設問Ⅸ 1年間の講義を通じて、どのような収穫があったと思いますか。新しい知識を得たとか、ものの見方や考え方が変わったとかいうだけでなく、出来るだけ例をあげて述べて下さい。

- ①治山、治水、ダム、地下水に対する知識や理解を得た。 (12名)
- ②水の重要性、水に対する関心が出てきた。 (7名)
- ③節水という、当り前のことの重要性の認識した。 (5名)
- ④自分が水に恵まれて生活してきたことを知った。 (5名)
- ⑤水が、昔から神聖なものであったこと。 (3名)
- ⑥世界の国々において、水に対する考え方随分違うこと。 (3名)
- ⑦文学「水」のような、これまで考えたこともないものを知った。 (3名)
- ⑧水に対して様々な分野からの見方や問題があることを知った。 (2名)
- ⑨熊本市の水事情、水に恵まれていること。 (2名)
- ⑩水の危険。 (2名)
- ⑪熊本地下水問題、その重要性。 (1名)
- ⑫水問題の現状が把握できた。 (1名)
- ⑬水の循環。 (1名)
- ⑭身近すぎて見過ごしていたことがわかった。 (1名)
- ⑮污水处理の仕組みがわかった。 (1名)
- ⑯指標生物が実生活で役立っていることを知った。 (1名)
- ⑰いろいろな方向から一つのものを見ると面白いと思った。 (1名)
- ⑱指標生物が実生活で役立っていることを知った。 (1名)

設問Ⅰの受講の動機と比べて、はるかに多様で、しかも具体的な回答になっている。治山、治水などに関する知識や理解を得たが最も多くて12名だが、これは前年の台風19号の被害で問題意識があったからであろう。また、「水」の問題が、大きな水の循環の一部に生じる問題であること、そのような「水」に対する理解を基礎に、節水という当り前のことの重要性の認識も出てきている。

1名だけが書いているが、指標生物が実生活で役立っていることを知ったという発見は重要である。というのも、学校で習ってきたことは入試のための勉強で、実生活は全く別と考える学生が多いからである。

(10) 水に関して、もっと知りたいこと。

設問Ⅹ もっと詳しく知りたいと思ったことを、あげて下さい。

- | | |
|-------------------------------|-------|
| ①利水と治水、治山、ダム、地下水について。 | (6名) |
| ②水の汚染の現状。 | (3名) |
| ③污水处理、下水道、家庭用浄化槽について。 | (3名) |
| ④水と人体、医学的な水と人体の関わり。 | (2名) |
| ⑤水の将来、水はいつまでもつか。 | (2名) |
| ⑥世界各国の水とのかかわり、世界的規模での水問題。 | (2名) |
| ⑦水と文学とのかかわり。 | (2名) |
| ⑧民俗学的、宗教的なアプローチ。 | (1名) |
| ⑨水と法律(慣行水利権、水質汚染の裁判など)。 | (1名) |
| ⑩水資源の確保や環境保全に関して、我々自身がなすべきこと。 | (1名) |
| ⑪水資源の開発。 | (1名) |
| ⑫川の話を、もっと聞きたい。 | (1名) |
| ⑬水という言葉の由来 | (1名) |
| 無回答、「特に無し」 | (12名) |

全体としての傾向は掴み難いが、学生の興味が多面的に、かつ、具体的になってきているのが感じられる。ただ、無回答が12名もあったのは残念である。

(11) 「水と人間」の授業に対する満足度

設問Ⅺ このような形の、1年間の講義はどうでしたか。○印をつけて下さい。

1. 期待通りで満足した
2. 期待はずれの点もあるが受講してよかった
3. 全く期待はずれだった

表9 学生と一般受講者の満足度

満足の程度	平成4年度 学生	昭和61年度 学生	昭和60年度 一般受講者
1. 期待通りで満足した	13名27.6%	14名23.0%	38名79.2%
2. 期待はずれの点もあるが受講してよかった	33名70.2%	45名75.4%	10名20.8%
3. 全く期待はずれだった	1名 2.1%	0	0
無回答		1名 1.6%	

昭和60年度の放送による公開講座「水と人間」におけるアンケートと同じ設問

「1. 期待通りで満足した」と「2. 期待はずれの点もあるが受講してよかった」の数は、学生と一般で大きく逆転している。これは、両者の期待度の高さと満足したいという願望の強さの違いであろう。ただ、学生に書かせた別の感想などからみて、「期待はずれ」の要素よりも「受講してよかった」の要素のほうがはるかに強い。

学生の反応

(1) ビデオの視聴態度

この形の授業を始めた昭和61年に、まず驚いたことは、学生達が実に熱心にテレビを見ることだった。テレビ世代の学生だから、もっと白けた態度が出ることを危惧していたが、13回を通じて熱心に視聴した。講義は、学生の反応を見ながら緩急をつけたり、説明を繰り返したりして行う。それで、学生はある程度安心して聴いていられるのに、ビデオは一方的に話が進行するから必死になって聴くのか。また、講義内容などとは別に、光を出すブラウン管には人を引き付ける機能があるのか。講義をするよりも熱心に聴くというのが、全講師が驚きをもって発見した事実であった。

学生たちはビデオでの講義は分かり易いという。これは、映像の効果に加え手、放送をするために講義内容が、多量の情報を詰め込みたい講師と、それを素人が分かる形にしようとするディレクターとのせめぎあいの中で整理され、45分の限られた時間の中に凝縮されているからである。また、具体的な映像で、比較的単純な構成になっていることも、見て聞いて分かり易い要因となっている。また、講義は体系立てた話であるのに対して、ビデオはジャーナリスチックだから入り易いことも考えられる。そのビデオの内容を総て講義でカバーするには、もっと長い講義時間が必要になる。1回の講義で、どの部分を、どのような形で講義したらよいか、また、ビデオと講義がそれぞれの長所を伸ばし、相互に補完し合うことを課題として「水と人間」の授業を行ってきた。

しかし、この6年の間に学生のビデオを見る態度に変化が現れてきた。以前のように熱心に視聴しなくなったのである。その理由は判然としないが、学生たちが視聴覚教材に馴れすぎたことも、大きな原因の一つではないかと考えている。質の良い視聴覚教材が次々に作られ、また、良くできた教材は繰り返し使用される。昔の子供は、ただ働く映像が存在するだけで感激した。それが、ひっきりなしに送られてくるテレビ映像の氾濫に対して、大部分の映像を「眺め捨て」るようになったのと、基本的には同じではなかろうか。

講義の中でビデオなどの映像教材を使うと学生たちは喜ぶ。しかし、それは映像を通じて具体的な理解ができるからか、それとも、暢気に眺めていればよい「息抜きの時間」になるからか、よく注意して考える必要がある。どんなに良質の映像教材でも、真剣に思考しながら見なければ表面的な理解に留まり、娯楽的な感覚で「眺め捨て」たことになる。また、そのような受身の視聴に続けて講義をしても、効果は加重され難い。

(2) ビデオ視聴後、直ちに内容などを書かせること

このことをワンパターンだと批判した学生もある。また、講師の側にも無駄なような感じがなくてもなかった。ビデオが終わったら、すぐに続きを話す方が効率的と感じる。しかし、目と耳から入った情報を文章化する作業の価値は予想以上に大きい。もともと、学生の理解の程度を確かめ、ビデオを手抜きしないで視聴させる手段として始めた方法だったが、書かせることで理解が深まり、次の講義への足がかりになることが大きな発見だった。

現代の学生は文章を書くことが苦手である。とくに、客観的な事実についての記述や、論理的に意見を述べるのが苦手である。というよりも、極端に言えば、相手に読んで貰い理解して貰うために文章に書くという意識すらない。自分の感じたことをそのまま文字にして、それに共感するかしないかは相手の勝手と考えているように思える。小学校からの学校教育の中でも、作文は自分の気持ちを表現することが大切で、客観的な記述や相手に説明する文章の訓練はしていない。試験でも、回答欄に記号や用語を記入する問題が中心で、記述式の問題は採点の困難さから排除されている。最近、小論文のような試験が行われていても、学生たちは小論文の受講対策としての勉強はしても、自分の思考を文章化する訓練はほとんど受けていない。

45分のビデオを視聴して文章にまとめることは、たくさんの情報の中から重要と思うものを選び出し、それを基礎に自分の論理を展開する作業である。自らの責任で選択し、自らの責任で枠組みを構築することで、与えられた問題の解答欄に正解を記入することは全く異質のものである。

学生たちは、みんなの意見を聞きたかったという。しかし、ビデオを視聴した後、全員で討議する形をとっても、よほどうまく誘導しないと発言が出てこない。おかしい発言をして恥をかくより、「謙虚に人の意見を聞く」という安全地帯に逃げ込む者が多過ぎる。また、相手の意見に反論することと、相手の人格を否定することの区別がつかないため、具体的な論議を避けて、抽象的に「良かった」という印象批評だけに落ち着くことも多い。

その意味から、全員に文章化を強要することは、全員に発言を求める効果もある。ただ、書く内容については、「感じたことではなく、考えたことを書く」、「思いついたことを羅列するのではなく、考えたことを論理的に書く」、「ビデオで紹介された事実や講師が述べた意見と、自分の意見を区別して書く」など、自分の感覚への共感を求めるのではなく、相手に説明し納得して貰える文章を書くのだと、繰り返し注意する必要がある。

書かせることの利点の一つに、学生の誤解を顕在化させることがある。たとえば、「⑩山を治める」で「治山・治水は国家百年の大計」と重要性を強調したところ、「樹木が育つのに時間がかかるから」と書いた学生が何人もあった。次の講義で確かめたところ、思いがけず多くの学生が「時間が経てば解決する」ような問題と誤解していた。つまり、学生の書いたものの

中から「誤解」を見出し、その誤解を解くところから次回の講義を治めることで、「百年の大計」の計画性や持続性などが理解させ易くなった。

13の個別テーマを総合的に関連させて理解することが総合科目の狙いである。「水と人間」の授業では、身近なテーマであることが幸いして、水を多面的に総合的に捉えることにほぼ成功している。自分の目の前に存在する水だけでなく、見えないところでの水の動きまでを意識するようになったとか、ありとあらゆるところで人間の生活が水と係わり合っていることを改めて認識したとか、水に対する見方や考え方が変わったと書く学生が多いからである。それも、具体的な事例も含めて書くようになることは、このビデオを多用した授業が成功している証拠と思う。とくに、理系の学生が毎年、水を単なる物質として捉えるのではなく「水を尊敬し、水を道徳的にも大切にする」と書くなどは貴重である。

ラジオ科目の調査

ラジオ科目の授業への利用は、昭和58年度製作の「熊本の文学」と平成4年度製作の「熊本の文学Ⅱ」を用いて、平成4年度に行った。そして、放送した内容だけの講義（テープ利用）と、それにテキストを使用して口頭での解説を加えた場合との比較を行った。

(1) 調査対象クラス

調査の対象としたのは、次にあげたAとBの2クラスで、比較のためCのクラスでも同様の調査（テスト）を試みた。

Aクラス：熊本大学の全学部の第1年次生を対象に開講されている「国文学Ⅰ」のクラスである。このクラスは「小人数クラス」といって、学生の積極的な参加によって学習を進め主旨から、受講者数を50名程度に制限している。文系学部も理系学部も区別せずに、希望者で編成されている。本年度の受講学生は52名。

Bクラス：熊本大学教育学部の第3年次生を対象に開講されている「国文学Ⅰ」のクラスである。教育学部では第2年次から専攻が分かれ、小学校課程専攻の学生も副専攻として中学校課程の特定学科などを専攻することになっている。したがって、このクラスには国語や英語を専攻する学生もいるが、文学とは全く別の専攻の学生もいる。その点、基本的にはAクラスと似た構成で、既にそれぞれの専攻に入った段階の第3年次生であることが違っている。本年度の受講学生は84名。

Cクラス：私立の女子大学である尚絅大学国文科の第3年次生を対象にした。受講学生は75名。

(2) 調査の方法と結果

第1回テストは、放送用のテープを聴かせた後でテストを行った。テキストも見せず、解説も加えず、テープを使用しただけで、内容について解説を加えるとか、関係する印刷資料を見せるとかは一切していない。第2回テストは、テキストを用いて放送用のテープを聴かせた後で、口頭で重要な点に解説を加える講義を行い、その後でテストを行った。その結果は表10の通りである。

表10 テストの得点（クラス毎の平均点）

クラス	第1回テスト（人数）	第2回テスト（人数）
A（熊本大学第1年次生）	38.8(52)	68.5(52)
B（熊本大学第3年次生）	46.7(84)	71.1(76)
C（尚絅大学第3年次生）	52.7(75)	74.4(74)

先ず目につくことは、第1回と第2回のテストの点数の差である。講義を行ったことの効果が、予想したよりもはるかに大きくて、歴然とした差が現れている。Aクラス、Bクラス、Cクラスのいずれも点数が伸びているが、その内容などについては後で述べる。

第1回・第2回とも点数は同じ序列で、Aクラス、Bクラス、Cクラスの順に点数が高くなっている。Aクラスは第1年次生であるため、文学を鑑賞するために必要な文学的な素養や一般社会常識が不足しているからであろう。Cクラスが高いのは、意識すると否とに拘らず、日頃から文学に親しんでいる、そのことの積み重ねの結果といえる。そして、BクラスがAクラスとCクラスとの中間に位置するのは、第3年次生になって文学的素養の基礎をなす一般社会常識、または、人をみる目が育ってきていることの現れであろう。

第1回と第2回の得点の差、すなわち伸び率はAクラス、Bクラス、Cクラスの順に大きい。Aクラスは第1回の得点は悪かったが、講義を聴くことで大きく伸び、第1回で良かったCクラスでは講義の効果が少ない。Cクラスはテープを聴くだけでも、重要な部分は正しくキャッチしており、講義を聴いても伸びる余地が少なくて理解していたということであろう。

これに対して、Aクラスは講義を聴いて初めて理解できたことが多かったからであろう。また、テープで漠然と受け入れても説明困難だったことが、テキストを見て講義を聴くことでポイントが掴めた者も多かったのであろう。ここに講義することの大きな効果が現れている。

放送による公開講座の一般受講者（社会人）は、文学的素養などの基礎が教養課程を学ぶ学生より高いのが普通だから、Cクラス以上に得点する人が多いと思われる。また、放送後のアンケートなどでも「よく理解できた」という回答が多い。しかし、これまで今回のようなテストは行っていないので、確かめることも必要であろう。

同じ内容を話していても、テープを聴かせるだけでは弱く、講義することの効果は大きい。講師が受講者の顔を見ながら、相手が分かっているか否かを確かめながら説明することが重要で、教師の存在価値が改めて実証されたといえる。

これは「拾いもの」の収穫だが、2回のテストの結果を学生に発表したことで興味深い効果が生まれた。Cクラスの学生は、文学専攻だから当たり前の結果ともいえるのだが、国立の熊本大学の学生よりも高い得点だったことに大きな自信を得た。このことは、その後の講義の中で発言が盛んになるなど、よい影響を残した。第1回の得点が極めて悪かったAクラスの学生は、第2回の講義後のテストで成績が伸びたことで自信を取り戻した。